

ティーチングポートフォリオ

佐賀女子短期大学 地域みらい 学科 氏 名 植木 明子

1. 教育の責任

この科目は、「こころとからだのしくみⅡ」のなかの終末期の段階にある人に関する介護の部分が技術の根拠となり、実際に技術を展開できることがこの科目の目標となる。

また、他の科目との関連においては「医療的ケア（講義）」「認知症の理解」「障害の理解」「コミュニケーション技術」においては授業で説明する項目に重なる部分もあるため、重層的に伝えるようにしている。

終末期に関する単元は、卒業した後の求められる介護福祉士像にある「予防からリハビリテーション、看取りまで、利用者の状態の変化に対応できる」に向けて、施設で亡くなる方が増える社会の変化とともに重要となってくる科目である。

2. 教育の実施における理念

生活支援技術Ⅳでは、人生の最終段階をよりよく生きる喜びと尊厳の保持を継続し介護支援を行う。利用者それぞれの終末期の意義を考え合い、自身の死生観を鍛える。そして、終末期の理解に立ち、生活の質を高めそのなかで最終段階の死の質を考え、コミュニケーション技術を身につける、チームアプローチの中で介護福祉士の役割を自覚し、援助と連携できる力を養う。

3. 教育の方法

具体的な到達目標は緊急時の対応、医療的行為についての理解を深める。延命治療、緩和ケア、リビングウィル、尊厳の保持とは何か、死生観とは何か理解できる。在宅、施設ターミナルケアでの他職種との連携、臨終時の介護技術など介護福祉士の役割を理解できる。以上を到達目標とし、自分史の作成、事例研究担当者の介護過程の展開においてまとめた内容から、学ぶようにしている。利用者が生きた生活を理解し、利用者の大切にしている価値観、人生

を同のように過ごしたいのかを、どのように介護過程の展開にふくめるかを再度考える機会としている。

具体的には、利用者の思いを引き出せるにはどうすればよいかという問いに対してグループで考え、そのことから答えを導き出すグループワークのなかで、あらためて利用者の理解を振り返る機会としている。

4. 教育の成果

学生がグループワークで学んだ、利用者の思いを引き出すためにはどうすればいいか、という問いの答えを導いたものを模造紙にまとめて、1年生へプレゼンテーションをさせた。実際は対面で、小グループを回ってワークショップ方式で行う予定であったが、新型コロナウイルスの予防のためリモートにて、全員を対象とした90分の発表会を行った。1年生からは積極的に質問があり、それに対して一生けんめいに2年生が答えていた。2年生にとっても、事例研究発表会の前で、発表の仕方を考える機会ともなった。1年生にとっては、これから行うケース学習の学びの場となった。

5. 目標

今年度の反省点として、これから行うことは何のために行うのかがわかりにくかったようである。次年度は、1年生の時に2年生の発表を聞いており、成果物として模造紙が残っているため、学生にとっても何をすることが理解しやすいと思われる。引きつづき介護過程の展開と連動して、「利用者の尊厳ある人生」を考えるため「よりよく死ぬためにはよりよく生きる」というテーマで進めていきたい。今年度は、施設の人からターミナルケアの実際を学ぶ講座を開く予定であったが、新型コロナウイルスのため中止となった。今年度は早い段階で講座を設けようにしたい。